

櫛の火・古井由吉



櫛の火

昭和四十九年十二月十日 初版発行
昭和五十年一月二十日 再版発行

著 者 古井由吉

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七二一

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 中西製本印刷株式会社

©1974 YOSHIKICHI FURUI

櫛の火

弥須子の母親がいったん郷里に戻った日だった。広部は午後から半日病室で過して、帰りぎわに、廊下に出て扉を閉めながら、例によってかるい心残りから、夕暮れ時の柔かな明るさの中に横たわる病人に目をやった。弥須子は彼が腰を上げた時からもう独りで天井を眺めていたが、扉の動きが止まると枕の上で顔をゆっくりこちらに向け、しばらく無表情に見つめ、それから、《行ってもいいわよ》とうなずいた。その顔が一瞬、二重に見えた。目鼻の際立ちすぎて別人のような顔と、その奥から弱々しく浮んで、彼に向かってうなずき、また沈んでいったいつもの顔と……。確かめようとした時には、弥須子はもう天井に向きなおし、けわしく静まった横顔しか見えなかった。

入院七日目で弥須子はあきらかに快方に向かっていた。盲腸の手術が遅れて軽い腹膜炎を併発し、一時は仰向いたきりの安静を命じられていたが、三日前から流動食を摂れるようになり、二日前か

ら自分で手洗いに通うことも許されていた。手術の翌日に郷里から駆けつけた母親はそれを機に医者に相談して、もう心配はないが退院までにはすこし日数がかかるだろうと言われ、どうしても放っておけない急用を片づけるために、往復四日の予定でひとまず帰ることになった。ちょうど付添婦も息子の嫁の出産で手伝いに行かねばならないとかいうことで交代を申し出ていた。母親は新しい付添婦を頼もうとしたが、弥須子はもう一人で何もかもできるし、一、二日のうちに個室から相部屋へ移ることになるだろうと言って断わった。すこし元気になる、見も知らぬ人間に付き添われるのを厭がるふうだった。東京には頼りになる親戚もいないらしく、母親は広部に、できるだけ見舞ってくれるよう、なにか変ったことがあったら電話で知らせてくれるよう、控え目に頼んでいた。

弥須子は広部にあずけられていた。大学に寄りつかなくなった学生の中途半端な存在を彼が外で運びまわっている間、病院の二階の隅の部屋で一日じゅう蒲団を細長くふくらまし、病いと汗のにおいにつつまれて横たわっている。見舞いに来た広部の目の前でとろとろとまどろみ、それからどんより目をひらいて、「ああ、汗まみれ」と溜息をつき、仰向けのまま寝巻の胸をはだけてタオルで拭きはじめ。肌がいつもより生白くて、かすかにくすみ、思いがけないところに紫色の血管を浮かせている。首から胸を赤くなるまでこすって、腹をそっと拭くと、片肘をついてからだをそろそろと起し、脚のほうへ手をやりかけ、急に眉をしかめて仰向けに返り、「お願い。まだお腹に力が入らない」と苦しそうに笑いながら彼にタオルを手渡す。そして彼が蒲団の下に手を入れて膝の裏から瘡せた太腿にかけてひどい汗を拭っている間、膝をかるく立てて衰弱感にひたっている。

入院の前日、およそ一年ぶりで逢った時にも、弥須子は以前より重い不透明なおいをまつわりつかせているように、広部には感じられた。待合せの喫茶店にうつ向いて入って来るところを奥の席から目にした時からそう感じたのだから、体臭のことではなかった。男とも、仲間たちともすっかり離れてしまった、と手紙にあったので、やつれた姿をして来るかと想像していたら、ひとまわりまるいからだつきになっていて、遠くから広部の姿を見つけてそつとうなずき、近くまで来ると見られるのを苦しがっているような笑いを目にふくませて頭をやんわりと下げ、神妙な顔つきになって向かいの席に腰をゆっくり沈めた。

その一年前、彼らの大学の騒ぎの、それももう終りに近い頃、弥須子はいきなりまわりの興奮の余熱に触れられたように、心身ともに熱っぽく瘠せ細り、激烈な常套句で広部の生き方をなじりながら、離れて行った。

四人の男がまわりにいた。もともと政治的な発想には疎い男たちで、最初のうちは、いや、騒ぎの盛りの時でさえまわりの興奮に冷淡だったのが、乱闘事件をさかいに学内が静かになり、解体を唱えていた学生も安堵したふうに日常の生活に戻り出した頃になって、揃いも揃って顔つきが変ってきた。

これほどの墮落が、これほどの頹廃があるだろうかと目を剝く顔、眉間に深い皺を寄せて目を鋭く細めた顔、惘れみながら憎む顔、そんな顔の間で、広部は議論のたびに無表情を守っていた。そのような怒りは義しからざる者を殺そうとするところまで行きつくのではないか、流血のおぞましさは、たとえ正義の流血だろうと、たとえ可能性としてあるだけでも、自分には堪えられない、自

分はむしろ命惜しさのふるえを尊しとする……と広部の中でも、言葉にすれば弱々しい不安が、議論を重ねるごとにひとつの極論となり、楯の強靱さを帯びていった。

ある日、弥須子は男たちの一人とバリケードの中で激論をかわして、屈服してきた。

最初のうち、弥須子は広部に、一緒にバリケードの中に入ってくれるよう懇願した。あらゆる類廃にたいする闘いのため、自分たちの愛のため、というような言葉をためらいもしないで口にした。その懇願の中に、すでに教化の熱意がひそんでいるのを、広部は感じ分けた。昏迷している人間を目覚めさせたいという使命感が言葉のはしほしに響いた。それにたいして、広部の反応の頑固さは彼自身にも意外だった。それだけで彼は弥須子を憎んで、許さなかった。弥須子も一転して憎しみを目にあらわすようになった。

弥須子にたいして陰に陽に広部の肩をもつ女がひとりいた。瘠せこけた同性の興奮にたいする憎しみに、彼女も興奮していた。

嫉妬さえ嫉妬として心をさいなまない、奇妙な時期だった。肉体関係をつづけてきた男女の感情というよりは、なにかもつと集合的な情念から、二人はおよそ個人的な翳りに乏しい、立場むきだしの固定観念を投げつけあった。バリケードのむさ苦しさのまつわりつくような身なりとおよそ不釣合いに清楚な化粧をほどこした顔を、弥須子は頬骨のふくらみからまだらに紅潮させ、やつれたからだをふるわせて、彼の《無自覚》をなじった。澄んだ声が、喋りこむほどに、アジ口調になっていく。広部のほうも負けず劣らず興奮していた。肉体的にも昂ぶっていた。そして硬直した観念の興奮にこうもたやすく揺すぶられる肉体を、自分とそれから弥須子の肉体を、侮蔑していた。

そのうちに弥須子は男のほうへ惹かれてゆき、その男をふくめて四人の仲間と、学内ではもつとも非妥協的な小グループとして行動をとにもするようになり、ある日、「からだの關係をもちました。あの人をあくまでも支えるつもりです」と広部に宣告して、まもなく仲間たちと大学から姿を消した。広部も大学に寄りつかなくなり、弥須子にたいする侮蔑から彼にからだを許したような女のアパートに三日も四日も泊りこんだり、喫茶店からふいに思い立って一緒に旅行に出たり、弥須子の興奮と釣合うだけの気ままらしい暮しをつづけていたが、半年ほどでその女にも嫌われた。

半年ぶりに大学に足を運ぶと、大学は何事もなかったように旧に復して、弥須子の噂がちらほらと広部の耳に入ってきた。運動に深入りした男のために、大学の籍を抜いて、バーではたらいいてという。大学をやめたことは事務の窓口で確かめると事実とわかったが、あとのほうの話は、噂をする者の誰ひとりとして弥須子の相手の男を知らず、広部との以前の關係にさえ気づいていないぐらいだから、たいして根拠のある話とも思えなかった。しかしそんな絵に描いたような猥褻の物語でも、半年前の弥須子の変貌ぶりを思うと、広部は払いのけられなかった。性のことでさえ端正で可憐だった女から、果敢に自分を犠牲にする泥臭い本性がいきなりあらわれて、彼から去って行った。まるで集団就職で出てきた女がはじめて男を好きになったように……。

一人の男とだけ同棲しているのではない、という噂もあった。それも荒涼とした話として語られているわけではかならずしもなく、むしろ女の自己放棄の奇譚のようなものとして、安泰となった自我の温みからなかなかに感嘆の表情で、何ごとでも信じようという淫らさで、語られていた。弥須子を見失っていることでは俺も五十歩百歩だ、と広部はようやく痛手を覚えた。あちこちでそれとな

くたずねると、弥須子の男も、仲間の男たちもあれきり大学に現われていないという。広部はまた大学に寄りつかなくなった。

「そこまで一所懸命じゃなかったわ」と弥須子はバーで働いて男を扶けていたという噂をあっさり否定した。そして脇腹に手をやり、背をかるく反らすように伸ばし、顔をやや上の空に響めて笑った。

男とは同棲もしなかったという。はじめの頃は四人の仲間と一緒に或る大学のバリケードにたてこもって、週一度ぐらいしか家に帰らないという垢まみれの暮しをしていた。そこを追い出されたあとは、まだ残っている都内の大学のバリケードを転々と移り、そこからあちこちの闘争に出かけていたが、どこでも同じように何日とたたないうちに排除され、最後のところでは広い校舎の中に三十人ほどの学生が寝泊りするだけになり、それもグループごとにあちらに五人、こちらに六人とお互いに離れた隅に陣取って反目しあうありさまで、夜になると陰惨な暴力沙汰もあった。そんな時、女がいることが仲間の四人の男たちにとってずいぶん負担になったが、それでも彼女を内につつまこむようにして四人はよくまとまっていた。難をおそれて自分ひとりだけバリケードを出る考えは彼女にもなかったし、仲間たちもそのことを望まなかった。その大学でも結局は民主化行動隊と称する意外に荒っぽい実力行使によって校舎の外へこづき出され、一人ずつ乗用車に押しこまれ、《どこまで送りましょうか》と両側に坐った男にいんぎんにたずねられ、黙りこんでいたら、大学からほどほどに離れた国電の駅前に置き去りにされた。

それを境いに五人は急に意欲を失い、もともと大学があればどの熱狂のあとで何事もなかったよ

うに旧に復することへの憤りから運動に加わっていたので、それぞれ退学届を出すことを最後の行動として運動から離れた。そして為ることがなくなったので、毎日のようにどこかに集まって無駄話をして過した。そのうちに、男たちの屈折したような、だらけたような会話の中で、女の弥須子がすこしずつ邪魔になっていくようだった。そのことに勘づいて彼女も男たちと気持を合わせるようつとめたが、つとめればつとめるほど、彼女の言動に男たちは鼻白むふうだった。そのくせ、それぞれ二人きりになると、しまりなく甘えかかってくる。ある日、彼女のことと四人の男たちの感情の行違いがあらわになった。ちょうど、久しぶりに思い立って皆で出かけた山の中のことで、厭なことが起りそうになったので、彼女は男を促して、その場で仲間たちから離れて二人で下山した。そのまま仲間たちとは切れた。それから二人はしばらく逢いつづけていたが、二人きりになると、お互いを寄せ合わせていたものがなくなっているのに気がつき出した。別れたのはもう半年前だった……。

見るからに重くるしそうなからだから、言葉を溜息まじりに押し出すふうに、弥須子は喋っていた。投げやりというほどではなかったが、物の言い方に無造作なところがあつた。一年前と同じような生硬な言葉を使ったかと思うと、女の身の上話によくあるような、手前勝手だねっとりとした言葉を口にする。微妙なことに触れながら、肝心なことは何ひとつ言わない。そして話の最中にときおり急に口をつぐんで、なにやら鈍い目つきになり、化粧の浮いた艶のない横顔を広部のすぐ目の先にさらして、あらぬかたを眺めやりながら、腰から上を前後にゆるく揺すったりした。

弥須子が話している間、広部は何度か問いをはさみかけて思いとどまった。たいそう恥知らずに

しているように見えても、問いはたちまちお互いの羞恥を揺すりそうだった。羞恥はいわば心を飛び越して、じかに肉体においてむきだしになっていた。そのため二人ともかえって、羞かしそうな顔をすることも、照れ臭そうな顔をすることもできずに、表情の取りようのない顔を大まじめに向かいあわせ、ただ目だけをわずかにそらしていた。まるで長い長い痴話喧嘩のはてに、疲れて二人して物を食べているような具合だった。一年前には痴話喧嘩らしいものはほとんどなかったのに……。

ひとつだけ、広部は冗談めかしてたずねた。長いこと呻きを押しころしていた問いだった。

「大変な噂が流れていたよ。四人にひとしく愛を、とかどうの……」

「ひどい話ね」と弥須子は眉をひそめた。しかし否定はしなかった。「わたしのアパートがひと頃、足場がよかったので、四人の中継所みたいに利用されていたことは、ほんとなのよ。機動隊やセクトと衝突がいちばん激しかった頃で、お互いに連絡が取れなくなったり、居場所がなくなったりすることがあってね。そんな時には、昼でも夜でも勝手にやって来て、わたしがいてもいなくても、いなければ隠し場所から鍵を取り出して、都合の良いくなるまで隠れていてもいいことになっていたの……」

話すうちに二人の目がまともに合った。弥須子は泣き顔のような笑いを浮べて目を伏せた。

「あの人は、どうしたの。一緒にいるところを街で見かけたことがあるわ、夜遅く」

「何でもないことなんだ、いちいちの行為は」と広部は言ったものだった。「ほんとうに何をしたかは、それとは別なんだ。こういう気持だったと説明しても、なおのこと、しかたがないし……」

「しかたがないのね」とつぶやいて弥須子はなにかまた言いかけ、目かもどかしげに光り、からだ

の重さの中に沈んだ。

それきり、そのことは、話されずじまいになった。

あとは、別れたどうしがたまたま街の中で出会ってちょっと喫茶店に立ち寄ったというふうな喋り方になった。席を立つ時には、弥須子は気分が悪いのでまっすぐ家に帰ると言っていた。広部も引き止める気はなかった。ところが、店を出たところで二人はあいまいに足を止め、降り出した驟雨でも見るように、夕暮れの人通りを見わたした。

「ほんとうに、もう帰るの」と誘いがひとりでに口から出た。

弥須子は胸に目を落として、鈍い立ち姿になった。

「呼び出したのは、わたしね」と、しばらくして、憂鬱そうな笑い顔が広部を見上げた。

あの夜、二人は自然に、食事をする場所を避けていた。弥須子はもう病気の予兆で食欲もなかったのにちがいない。広部は、二人して顔をつき合わせて物を食べるという思いにたえられなかった。酒がまわるにつれ、弥須子のからだは喫茶店にいた時の重さからほぐれていった。血がようやく滑かに流れ出して、肌に淀んでいた濁りが引いて行くふうだった。カウンターの高い椅子にこぢんまりと腰をかけ、背を柔かに心地良さそうにまるめ、グラスのそばに肘をついて、ひとりでたえず笑いを目にふくませていた。天井から降りかかる音楽に耳を聳されて、二人はほとんど口もきかなかったが、顔を向かい合わせずにいるせい、まわりのざわめきにつつまれているせい、黙っていることが苦にならなかった。ときたま広部が話しかけると、弥須子は頬杖の上からゆっくり顔を向け、話にかかわりなく、彼の顔を珍しそうに見た。甘えのようなものはすこしも混えず、ただ不

思議そうに、広部という男がいまそこにいるのを、話しかけているのを、一方的に見ていた。何度目かに広部が見られるのを苦しんで話の途中で口をつぐむと、弥須子はゆったりと彼の目を見つめ、細くてなまなましい声でつぶやいた。

「わたし、見ぐるしくなったでしょう。あなたも、前にくらべると、ずいぶん……」

羞恥とも嫌悪ともつかないものが、同意を求めるように、彼の目にじわりと粘りついてきた。お互いに求めあっていることを、広部はふいに意識した。そして弥須子のからだのほうから伸びて来るものを探りあてようとしたが、視線が離れると、もう何も伝わって来なかった。彼のほうからもやはり訝りのほかは、何も伸びて行かなかった。意志はまるでたらいでいなかった。ただ、以前よく知り合ったからだが、お互いにまた疎遠になって、腰を並べて黙りこんでいた。

店を出てしばらく歩いたあと、肩の触れ合ったところで二人は足を止め、人の行きかう中で、いままでに何度となくくりかえした呼吸で目を見かわした。弥須子はそらした目にまた笑いをふくませ、背をこころもち反らして、みぞおちにそっと手をやり、からだの痛みを感じはかるような顔つきになった。そして以前の合言葉で彼が誘うと、つらそうに首をちよっとかしげ、それからくる二度うなずいた。

部屋に入って、二人はひどく湿っぽくて身の置きどころもない場所に來たふうに椅子に浅く腰をかけ、長いこと黙ってあちこちを見まわしていたが、やがてあいまいに立ち上がり、唇も合わせずに背を向けあって服を脱ぎ、まだ目をわずかずつそむけあいながら、このままではあらわな肌の意識から、求めが陰鬱な笑いへくずれ出して、どうすることもできなくなるとでもいうように、すぐ

にからだを寄せあった。弥須子は彼の手首をきつくつかんで愛撫を否みながら、胸をびったり押つけてきた。あとは以前と何ひとつ変りがなかった。

そのあとで弥須子はすぐに眠りこんだ。広部の肩に額を寄せ、腰を海老のようにまるめ、胸の前で両腕を小さくちぢこめて、触ってもつねってもすこしの反応もない、気味の悪いほど深い眠りだった。蒲団のへりからのぞくまるい肩にも、ところどころに小さな傷痕のある生白い背にも、まるで見覚えがなかった。

部屋の中が白みはじめた頃、弥須子は彼の腰のあたりで横坐りになって右手を腰のくびれに、左手を頬にあて、いくらか放心の態で彼のほうを眺めやっていた。薄明りの中で乳房が蒼く、ふくらみの間に濃い陰を流していた。肩のまるみの豊かさにくらべて不釣り合いなほど、腕が細くいたいたしく見えた。奇妙なことに、しばらくの間、広部はその両腕のありかをたしかに目にしていながら、弥須子が左手を床についてからだの重みを支えているかのように思っていた。そればかりか、右手が彼の膝の上にのせられているかのように、蒲団のそのあたりに穏かな重みさえ感じていた。

「それじゃあ、腕が四本だ」と彼はふと気がついて、声に出してつぶやいた。

「腕が四本、なに……」と弥須子は目を剝いて、それから自分の恰好にようやく気づいたらしく、照れ臭そうに胸を腕で覆って彼の横に入ってきた。もう長いことそうして坐っていたのか、肌が冷えきって、内の温みを守るために固く締まっていた。腰のうしろに手をまわすと、「ああ、温くて気持ちいい。そうしていて」と目を細めた。もう一度、彼は求めた。弥須子は溜息をついて彼をうけ入れた。からだの前夜の夜よりも、以前のどの時よりも重くて、揺がなかった。男の情欲を憫ん

で、身をただあずけているような、ひんやりとした、しかしどこか根のやさしい自己放棄の感じがあった。それでいて、前の夜より豊かな息を胸の奥から静かにつきながら、汗ばむにつれ、濃い香油のようなにおいをふくらませた。

もう一度、弥須子は眠りこみかけたが、しばらくして、腫れぼったい目をひらいた。

「帰りましょう、ここじゃよく眠れないわ」

そしてベッドから降りて、湯を使いにも行かずに、彼の目の前で背を向けて肌着をつけはじめた。ただ寢所を替えるだけ、というふうなうつらうつらとしたところがあった。

あの日、弥須子は朝方の駅前で広部と別れたあと車を拾ってまっすぐアパートに帰り、三時間ほどぐっすり眠って腹痛で目を覚まし、あとは一日じゅう寢床の中で痛みをこらえていた。慢性ぎみの盲腸だったらしく、激しい痛みがないかわりに、鈍いさしこみが三十分おきぐらいにしつこく繰り返したが、二、三日前にも同じようなことがあったので、今度もそのうちに痛みが消えるだろうと彼女は待っていた。夜になると、痛みは妙に重くなって、みぞおちから下腹にかけて淀んだきりになった。これは入院しなくてはならない病気だと感じたのは、一瞬の激痛を境い目にしてであり、その時、何とはなしに弥須子は涙を流したという。寢床から起き上がった時にはもう立ってもいられないほどだった。しかし涙がとまると弥須子は我ながら薄気味の悪いほど落着いてしまい、なにか怒りで静まりかえったふうになり、からだの重みをはぐらかすようにそっと動いて部屋の中を片づけ、身のまわりのものを旅行鞆につめこんだ。そして濡れたタオルでからだを拭き、鏡の前で着替えをして化粧もさっとしてから、管理人にも隣りにも声をかけずに外に出て、ひとりで表通りまで